皮膚科領域における Aminosidine の治験

川村太郎 高橋 久 富沢尊儀
東大皮膚科

昭和 41 年 11 月 19 日 Aminosidine 研究会において報告したわれわれの治験症例は全部で 16 例であつたがさらに 14 例追加治験を行なつたので前回の症例と併せて Aminosidine の効果を皮膚科領域における疾患について検討したい。

Aminosidine の投与法は原則として成人に 1～2A (1A:

表 1

症例	年令	性	菌	用量	回数	効果	備考
Furunkel	30	♀	*Sta. aur.*	1 A	5回	±	治癒まで長く硬結とれず
Furunkel	24	♂	*Sta. aur.*	1	2	?	以後来院せず
Furunkel	24	♀	*Sta. aur.*	1	2	—	
Furunkel	27	♂	*Sta. aur.*	2	3	+	
Furunculosis	18	♂	*Sta. aur.*	1	3	±	
Furunculosis	20	♀	*Sta. aur.*	1 2	1 4	+	皮疹の新生はなくなる
Furunculosis	20	♀	*Sta. aur.*	2	2	?	尿蛋白 spur
Furunculosis	28	♂	*Sta. aur.*	2 1	3 2	+	後に再発
Furunculosis	22	♂	*Sta. aur.*	2	5	—	皮疹の新生あり増数
Furunculosis	46	♀	*Sta. aur.*	2	3	—	尿蛋白 spur シグママイシンで改善
Steroid Acne	33	♂	*Sta. aur.*	1	2	—	貧血および肝炎あるため中止
Acne conglobata	19	♂	*Sta. aur.*	2	6	+	
Sycosis vulgaris	53	♂	*Sta. aur.*	1 2	12 7	± +	
Phlegmone	35	♀	不明	2	4	+	
Folliculitis decalvans	69	♂	*Sta. aur.*	2	1	?	来院せず
Pyoderma chronica abscedens et suffodiens	16	♂	*Sta. epi.*	2	7	—	全く不変
Pyodermie ?	2	♀	*Sta. epi.* *Str. viridans* *Neisseria*	1	5	—	全く不変
Röntgengeschwür	50	♂	*Sta. aur.* *Pseudomonas*	1	14	—	中途から PS が混合感染
Unterschen kelgeschwür	65	♀	*Proteus*	1 2	10 3	—	
Geschwür (Dermatitis factitia)	16	♀	*Paracolon*	1	6	+	局所に使用(2日で菌(—))
Eczema impetiginosum	9	♂	*Sta. aur.*	1/2	6	±	治療中は疹発生あり
Eczema impetiginosum	9	♀	*Sta. epi.*	1	3	+	
Contact dermatitis	30	♂	*Sta. epi.*	2	3	—	全く不変
Impetigo contagiosa	2	♂	*Sta. aur.*	1/3	9	—	治療中皮疹発生あり
Impetigo contagiosa	2	♂	*Sta. aur.*	1/3	6	+	
Impetigo contagiosa	4	♀	*Sta. aur.*	1/2	3	—	全く不変
Impetigo contagiosa	6	♀	*Sta. aur.*	1/2	4	+	
Staphylodermie	31	♂	*Sta. aur.*	1	11	±	少しずつ改善
Kleinkrustige Impetigo	23	♀	*Sta. aur.*	1	7	+	
Impetigo Bockhart	30	♂	*Sta. aur.*	1	5	±	

350 mg 力価）を筋注し小児は年令に応じて適宜減量した。併用療法は特に行なわず一部局所処置を施した例もあるがほとんどは単ガーゼまたはトレックスガーゼにて病巣を被覆するのみとした。初回の注射前に本剤に対する過敏性をスクラッチテストで観察したが全症例共過敏性を起こさなかつた。副作用についても患者から特別な訴えなくかつ治療が比較的長期（5回注射以上）におよんだものは血液，尿，聴力検査などを行なつたが異常を認めなかつた。

効果判定は主として臨床症状の経過によつたが，治癒に要した日数，Abklatsch によつて得られた菌の集落数の変動なども参考にした。その結果は表1のごとくである（本症例中にはすでに報告ずみの 16 例を含む）。

これらを3群の類似疾患別に分類して有効率をみた。すなわち第1群は膿痂疹などの比較的浅い皮膚病変をとるもの，第2群は癤あるいは毛嚢炎の形をとるもの，第3群は深い潰瘍の形をとるもので，それぞれの有効率および全体での有効率は表2のとおりである。

以上のごとく Aminosidine は膿痂疹のような浅い皮膚病変をとるものには有効率が高いが癤，毛嚢炎型成は潰瘍型の皮膚病変をとるものには低い。しかも膿痂疹様皮疹に対しては軟膏療法がきわめて有効であるため Aminosidine の注射がこれにとつて変るほどよい治療法とはいえない。また潰瘍に対して有効であつた1例は Aminosidine を局所に使用したものであつて一般の潰瘍に対して Aminosidine の全身的な投与が有効であるとはいえない。癤，毛嚢炎に対しても有効率が 50% 以下ではあまり推奨できない。結論としては皮膚科領域における Aminosidine の注射療法はあまり有効ではないようである。

表 2

疾患	例数	有効	やや有効	無効	有効率
伝染性膿痂疹，膿痂疹性湿疹，および膿痂疹様疾患	10	4	3	3	70%
癤および他の疾患から癤毛嚢炎を2次的に起したもの	17	6	2	6 不明 3	47%
潰瘍に2次感染を起したもの	3	1	0	2	33%
計	30	11	3	11	47%

CLINICAL APPLICATION OF AMINOSIDINE TO SKIN DISEASES

TARO KAWAMURA, HISASHI TAKAHASHI & TAKANORI TOMIZAWA
Department of Dermatology, Tokyo University School of Medicine

Aminosidine was clinically applied to 30 cases of dermatological infections.

Effective results were obtained in the cases of impetigo, but the results were ineffective in the cases of furuncle or folliculitis and some chronic pyodermas.

It does not seem that aminosidine can be an excellent drug so far as dermatological infections are concerned.